

増田みず子

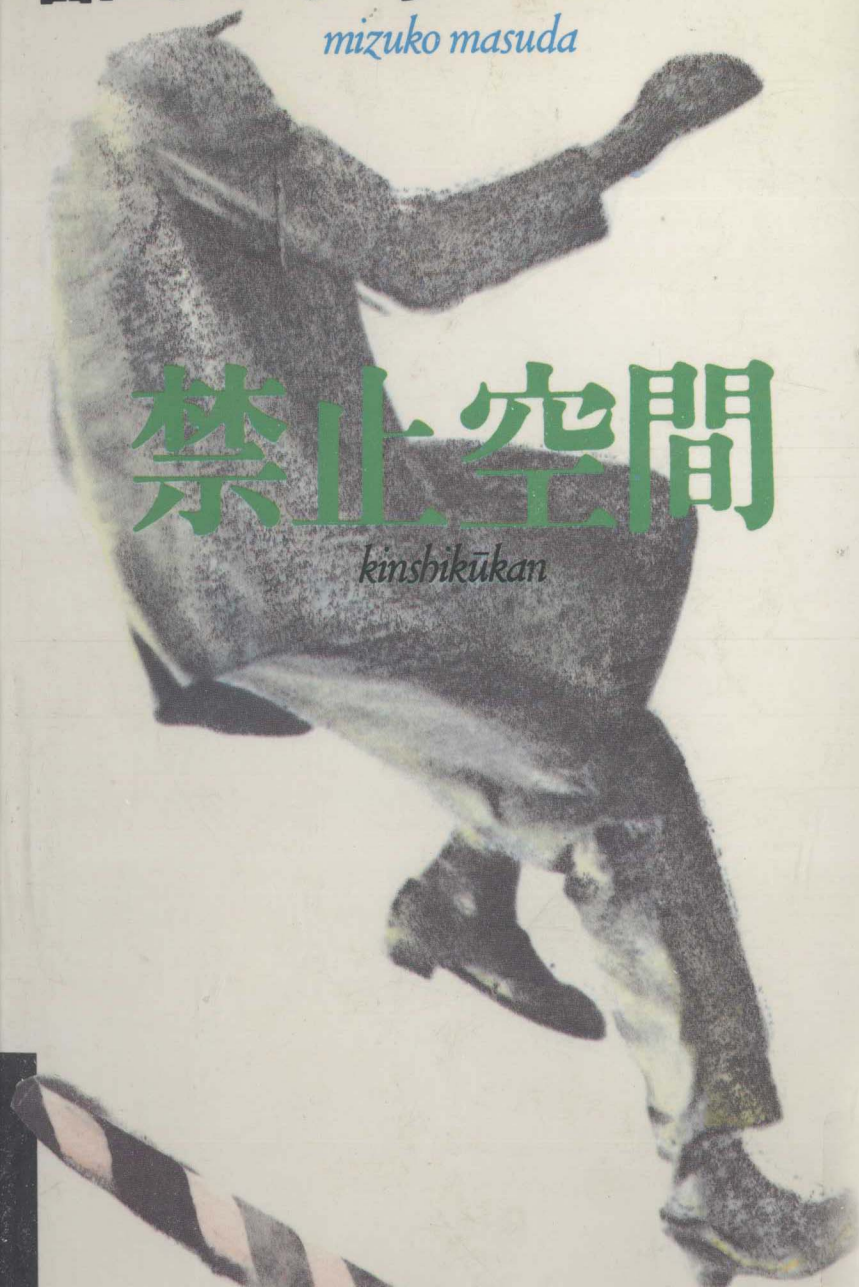
mizuko masuda

河出書き下ろし

長篇小説叢書

禁止空間

kinshikūkan



河出書き下ろし
長編小説

禁止空間

kinshikūkan

増田みず子

河出書房新社

書き下ろし長篇小説叢書2

禁止空間

一九八八年十月十五日 初版印刷
一九八八年十月二十五日 初版発行

著 者 増田みず子

装 幀 菊地信義

発行者 清水 勝

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―一

電話 (〇三) 四〇四―一二〇一(営業)

(〇三) 四〇四―八六一一(編集)

振替口座(東京)〇―一〇八〇二

印刷 株式会社享有堂印刷所

製本 加藤製本株式会社

©1988 Printed in Japan

定価はカバー・帯に表示してあります
落し本・乱し本はおとりかえいたしません

ISBN4-309-61022-6

禁止空間

間

室内が歪んでいる。建物が、というより、室内の空気の濃さに急にムラができたような感じだった。見る方向によって、室内の限られた部分、とくに奥の部屋の南側の壁あたりが、歪んでいるとしか思えない状態になる。ちょうど、壁の前にかすかな陽光がたって、ゆらいでいるように見える。

そのマンションの一室に引っ越してきてから、まだ日が浅かった。荷物の片づけや転居にともなう手続きなどのために、バタバタと慌しい日々を過ごしたあと、ようやく、自分の家だという実感もいくらか生じてきた途端のことだった。

そこは、寝室に使うと決めていた和室の六畳間である。はじめから万年床にするつ

もりでいたから、予定どおり、越してきた当日からふとんは敷きっ放しになっている。埃も溜まっている。が、自分でいうのも何だが、家が新しいので、埃もどことなく新しげに見えて、不潔な感じはない。

一人暮らしの気やすさである。埃を他人に吸わせるわけではない。時とともに育ちふとっていく埃が、その新しい家に自分とともに住みついた生き物のように思えて、愛着を覚えることさえある。

この数日はことに、カーテンをあけるのも忘れている。そのせいか、部屋のなかがいくらか湿っぽくなっているようだった。

新しいマンションで壁に結露ができるという話も耳にしている。今のところ眼に見える結露はないが、あるいは湿気が、ただでさえこもって澱んでいる空氣に、何かいたずらでもしているのではあるまいか。

川嶋静生は、会社からマンションに戻ってくると、毎夜のように問題の部屋の壁を気にしながらも、なぜかそこで長い時間を過ごすようになっていた。ほかに、することなかった。待っている家族もなく、ろくに家財道具も揃っていない。自分の家だとはいっても、住み慣れたというほど住んではおらず、戻ってきても手持ちぶさたで、

それにどういうわけかそこが自分の家だと思ふとなんとなくきまりが悪かった。

壁を見ているだけでも、気が紛れる。本当にかすかながらでも異変が生じているのかどうか、実は自信はないのである。あると思えばあるように思える、その程度でしかなかった。

ないと思えばない。しかしなかったら自分のやっていることが馬鹿馬鹿しくなって、気分 of 始末に困るだろう。そう思いながら、壁を見ている。

白い壁をスクリーンにして、様々な情景が記憶のなかから甦り、映り、消えていく。壁の前にすわりこんで夜の時間を過ごすようになってから、静生はむしろ静かで落ちついた気持を久しぶりに取り戻すことができた、といってもよかった。

それまでにいろいろなことがありすぎた。あまり思いだしたくないことばかりだった。自分の気持をいちいち振り返るゆとりのないまま、その場その場で一時しのぎにやり過ごしてきた時間が、まだ体のなかに溜まって、渦を巻いているような不快感が、ずっとつきまとっていた。それが今、真新しい建材のにおいの漂う部屋で壁と向い合っていると、ようようゆっくりと流れはじめたのがわかる。澱みかけていた時間が体の外へ少しずつ排泄されていくのが感じられる。

くつろぎに似た時間だった。

その部屋を静生はいつの間にか、緑の部屋と呼ぶようになった。めったに明りもつけず、カーテンもあけない。部屋の空気をなるべく乱したくなかった。その部屋は、時とともに一種特別な雰囲気を持つようになっていった。

部屋は三室ある。ドアをあけて玄関に入るとすぐそこがダイニングルームになっており、その奥は、東を向いた二室が並んでいる。間は壁で区切られている。一室は洋間、一室は和室づくりになっているが、広さはどちらも同じである。二室の外はベランダで広い道路に面している。あとはダイニングルームの続きにトイレと風呂場があるだけだ。奥の部屋には、敷きつ放しの夜具以外、ほとんど何も置いてない。ほかの部屋には、生活に必要な最低限の日用品だけの簡単な家具だが、雑然と置いてある。それでも寝室と決めた関係上、家にいればその部屋で過ごす時間がいちばん長い。ところが、そこにいると日常から遠く離れている錯覚を起こすのだった。たとえば、出口も入口もない深いトンネルに入りこんでしまったような不思議な気分になる。頭がぼうつとして、自分がどこにいるか忘れてしまうような、そのくせ、遠い昔に忘れて

しまったことが思いだされてくるような。

実際には忘れることも思いだすこともないのだが、錯覚を体の芯からひきだしてくるような、不思議な気分を繰り返し味わうことができて、静生はむしろ自分から進んで、そんな気分に入ろうと、毎夜、その部屋へ入っていくのを楽しみにするようにさえなっていた。外部との隔離感が、その頃ささいなことではだちやすくなっていた静生の気持を、やさしくなだめる働きをするようだった。

その部屋には、ほんのりと緑色を帯びた空気がいつも満ちている。分厚な濃い草色のカーテンが、外の光や闇を静かに漉して取りこみ、薄暗がりの状態に保っている。

壁も淡い緑色に染まっている。そこに映る、あるかないかの影も、同じ色に染まりながら、時に動き、時によっては色を濃くする。多分、外からの光線の加減で、カーテンのひだなどが濃淡の影になって、壁の上に様々な形をつくりだすのだろう。その時の調子で壁が歪んで見えることがあっても、別に不思議ではあるまい。そう思っていた。少なくともはじめは気にしなかった。訝しく思うより先に、その部屋の薄暗がりの状態が、静生の体にしっくりと合って、居心地よさを誘いだした。落ちつきたいと思うとき、静生はその部屋で万年床の上にごろりと横になった。すると自然に顔の

向きが決まった。眼の前にある壁に、うつすらと影模様が描きだされているような気がした。いつの間にかそれにじっと見入るようになっていた。時々、影の織りなす模様の形を見定めようと、眼を凝らし、眉根にしわを寄せている自分に気がつくことがある。暗がりのなかで影の輪郭を見分けることなど、もともと無理な話である。それでも静生はいつの間にか我を忘れて視線を吸いこまれ、見つめすぎて、かえって眼の焦点が合わなくなり、見るものすべての輪郭がぼやけてしまうこともたびたびだった。なぜそんなに気にするのだろう。自分で小首をひねりながら、改めてまじまじと見入ったりする。その間に、驚くほど速く時間が流れていった。テレビを観なくなった。蛇口をひねって湯を出せばいいだけの風呂へ入るのすら、面倒になりがちだった。着替えもそこそこに閉じこもりたい衝動に駆られる。会社で仕事をしていても、夕方の定刻近くになると、その部屋の壁が思い浮かび、早く帰りたくてそわそわしてくるのだ。まさか、そのために仕事がおろそかになるところまではいかなかったけれども。

部屋の様子がおかしい、と最初に感じたのは、越してきてから二回目の日曜日を迎

えた朝だった。引越しが十一月はじめの土曜日だったから、九日目の朝ということになる。あいにく引越しの日取りを決めて以来、急に会社の仕事が忙しくなって、仕事と荷物の整理の両方に追いたてられる毎日が続いた。何も考えるヒマがなかった。生まれ育った家を離れるについて、感傷の入りこむ隙のなかったことは、後になってみればありがたかったと思わなくもないが、当時は体力が持つかどうか本気で心配した。何もこんな時期を選んで無理に引越さなくても、自分のことながら呆れていた。

マンションに移る前、静生は古い一軒家に一人で住んでいた。生まれ育った自分の家だったが、次第に家族が減って行って、最後はとうとう一人で暮すはめになったのだった。一軒家は、いくら住み慣れたボロ家でも、二十代の独身サラリーマンには重すぎた。その頃の心境としては、逃げだす、といった方がふさわしかっただろう。

わずかな荷物をレンタカーに積んで、一人で出てきた。マンションに着いて、一人で荷物を運び入れた。すべてが終わったとき、睡眠時間を惜しんで働きまくった数日分の疲れが、体の表面に浮く脂のように、どっと噴きだしてきた。体中の筋肉が痺れて動かなかった。静生は、荷物の間に倒れこむと、そのまま水底に沈みこむように眠

りに落ちた。翌日の午後まで眼を覚まさなかった。

それから一週間、再び仕事と荷物の整理に忙殺された。口にくわえた煙草から灰がぽとりと落ちるのを、勤め先の同僚に幾度か注意された。湯を流し放しの浴槽で、うたた寝した。

ようやく部屋の片づけが一段落して、次に回ってきた日曜日の朝、静生はようやく久々に寝足りたという満足感に浸されながら、ごく自然に眼を覚ました。部屋はやわらかい緑の光に満ちていた。表の道路を走る車の数も日曜は少なく、静かだった。

仰向けになったまま、首を巡らせて何気なく壁を見た。南側の、隣家との境でもある側の壁である。そこが一面にぼうっと光って、心なしかふくらんでいるように見える。静生は体を起こして、眼をこすった。寝呆けて眼がかすれているのかと思った。見れば見るほど眼の錯覚のような気がしてくる。見るうちに眼がちちかちかして、壁が光っているのか、逆にくすんで汚れているように見えるのか、ふくらんでいるのかへこんでいるのか、しまいにはわからなくなった。カーテンをあけ、窓をあけて、陽ざしと風を招じ入れると、壁はすうっと明るみを消して、何の変哲もない白い垂直の平面に戻った。何度も見直したが、おかしなところはどこにもなかった。

気のせいでも、眼の疲れでも、原因がわかればそれでよかった。壁が内側に光を抱いたように明るんだり、ふくらんだりすることの方がどだいおかしいのである。実際に壁に歪みがあるのだとしたら、マンション自体が欠陥品になるわけで、苦笑して首を捻っているだけではすまなくなる。

そのマンションを買うにあたっては、静生も自分なりに最大限勉強したつもりだ。生まれてはじめての大きな買物だった。適当な相談相手がいなかったたので、結局、業界で最大手の建設会社の施工、ということだけを支えにした。建物の強度を売り物にしている会社だった。

静生は、壁がほのかな光を放ち、ふやけたようにふくらんでいる、と感じたときの印象をもう一度思いだし、どこことなくすっきりしなかったたので、少し離れた位置からよく観察した。近づいて、手のひらで撫で、こすり、軽く叩いてみた。

異常は感じられなかった。

そう簡単に新築のマンションに狂いが生じるわけではない。ほっとして、それなり忘れてしまった。

だが、その夜また壁の様子がおかしくなった。深夜だった。前夜たっぷり眠りすぎ

たせいか、なかなか寝つくことができずに、静生はいったんふとんから出て、シャワーを浴びた。思いきり長い時間熱い湯に打たれてから寢床に戻った。そしてふと眼に入った壁面が、いやに白っぽいような気がした。二度目のことだからいやな予感がして、じっと見つめていた。むろん半ばは気のせいだと思っている。それに深夜零時すぎの明りをつけていない部屋のなかである。マンションの一階が終夜営業のコンビニエンスストアになっているから、その照明や街灯の光がほのかにしみこんで、前後左右の見分けがつかないというほどの暗さではなかったが、明るい風呂場から暗い寢室に戻ったばかりの眼に、壁の白さは異様にくっきりと際立った。

壁面は、白く光る薄い煙に包まれているように見えた。うっすらとした影が、ゆっくりと揺らぎながら横切っていった。一瞬静生は、人の影が映っている、と感じた。むろん自分の影ではない。思わず振り向いて、窓の外のベランダに警戒の視線を走らせた。カーテンには何も映っていなかった。一応、念のためにベランダも点検して、誰もいないのを確かめた。そうこうしているうちに、気がつくと、壁はもとのように暗がりの奥へ後退していた。水にじんだ影のように輪郭がぼやけて、壁は闇のなかに溶けて、何事もなかったように落ちついていた。